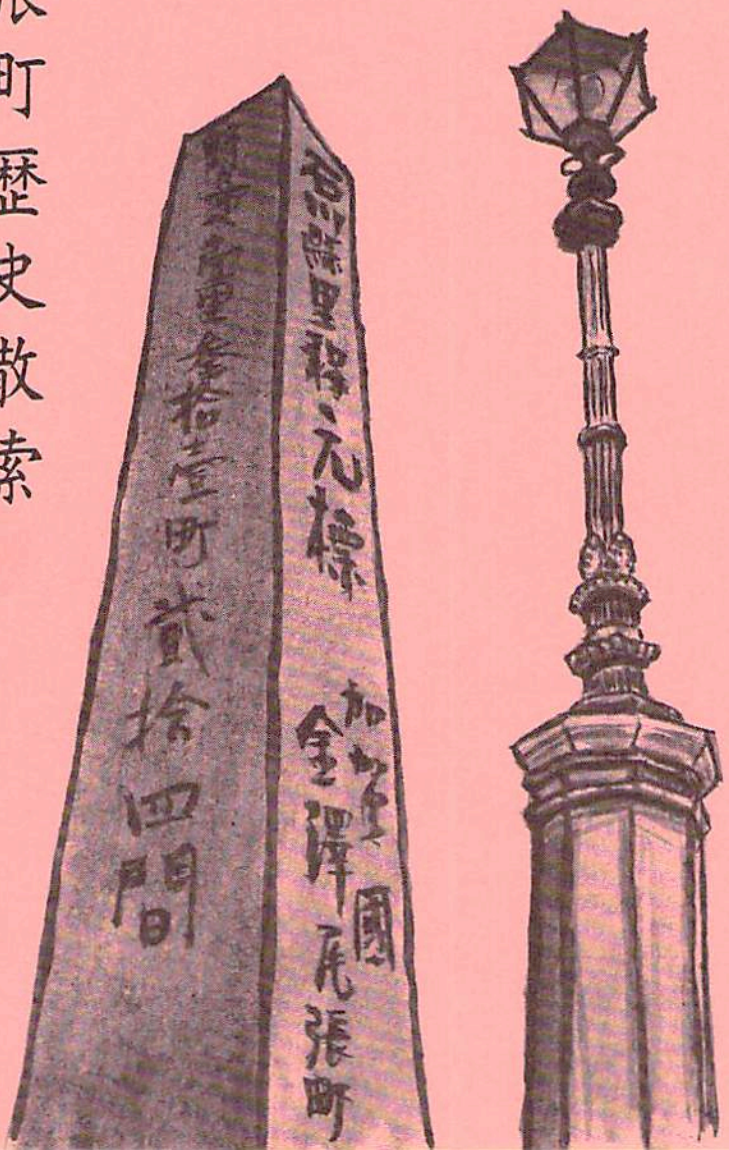
おもしろ散歩案内書

尾張町歴史散索

アナログに生きる商家の人情と浪漫



目次

加賀国金沢尾張町……一
町並の変遷……二
「おやま」に至るまで……四
枯れ木橋挿話……七
城下町金沢の町作り……八
懸作りの繁栄とともに……九
江戸三度京三度の起点・尾張町……十一
尾張町の過去と未来……十三
あとがき……十六

＝さし絵　村上隆氏（尾張町　村上洋品店社長）＝

加賀国金沢尾張町

浅野川大橋から橋場町の交差点を右に向けて、だんだら坂を上りだすと、惣構堀に架かっている赤戸室[あかとむろ]石で作られた枯れ木橋があります。橋の右岸を見ると、『石川県里程元標・加賀国金沢尾張町』と書かれた標柱が静かに立っている姿が目について来ます。そのたたずまいは、絶えることのない時間(歴史)の流れにたゆたい、今の中に過去と未来を包含し、じっくりと空間(尾張町周辺地域)に泌み込むようにしているように感じられるのです。

尾張町は、この枯れ木橋たもとから、お城の正門に当たる大手門に沿って博労町[ばくろうまち]交差点に至る三百二十メートル余りが本通りといわれています。近年、町名統合により周辺地域一帯が全て尾張町の名になってしまったものの、昔は尾張町・上新町・下新町・鍵町・橋場町・母衣町[ほろまち]・主計町[かぞえまち]・上今町・下今町・殿町・袋町・博労町・桶町・市姫通り・武蔵とそれぞれの町名を持っていたわけであります。尾張町も厳密にいえば、参勤交替の行列が主に通った下尾張町と上尾張町(大手門の前の筋で別れていた)に昔は分かれていたのです。

「三州名跡志」には、〃利家入城の時分、荒子(現在名古屋市中川区荒子町)で用命を承った町人を召寄せて居住せしめた処である〃と尾張町の名の由来について書かれています。

明治六年の太政官達により、全国主要街道の府県本庁所在地に木柱を建て、この場所を管内諸道の起点即ち元標と定めて設置されたことをみても、それはほのかな薫りとして漂ってきます。けれど、この土地の歴史はさらに遡のぼり、金沢そのものの生業の由来に深く関わっているようです。

町並の変遷

外から見る金沢は、北陸の古都、文化の都として一般に映っており、緑多く、情緒深い、しっとりとした雰囲気は、住み易さのベストに選ばれている位です。確かに江戸時代以来、最大の外様大名加賀藩の統治の下、金沢城の石垣下に住まいした庶民は、宝生流能楽による謡や茶道、又加賀友禅・九谷焼・大樋焼に代表される文化や伝統産業に育くまれて、おっとりとした町となって来ております。幕末から明治維新の頃の都市人口を見ても、東京・大坂・京都に次いで四番目という勢いのあったことが、一種の名状しがたい自負を持ってしまったせいでしょうか。　明治に入ってからも、浅野川界隈では泉鏡花を、犀川界隈では室生犀星などを輩出し、どこにでも在る住宅及び産業都市とはこの町は明らかに一線を画した個性を持たされています。北陸の雪に閉じ込められた生活が、伝統的に芸術・文化の面に刺激を与えることとなったというのは少しいい過ぎですが、何かがこの町に琴線を

響かせているのは間違いがないことです。

一方では、金沢城内に歩兵第七連隊だけでなく、第九師団本部もあり、中京北信越一帯の関連家族で賑わったりしていました。これらの与えられた状況に満足しきったきらいが、ある意味では戦後の経済発展に、一歩も二歩も遅れを取ったといえなくもありません。しかし地道ながら、金沢の産業は国家的規模のものの一部であったり、大手産業の下請けでなかったがために、極端な発展こそ望めませんでしたが、しっかりと自主独立の力を付けて実力を蓄えてき続けています。

城下町金沢の発展は、このようにお城とその周辺を抜きにしては語れません。時代を遡のぼってみれば、この付近は荘園時代の飛び地であったり、浅野川を利用した商業集落の山崎村凹市であったり、加賀一向一揆衆による百年間の拠点であったり、そして戦国時代の荒波の中から前田利家公が入城して三百年間の本格的治世が行われたりしたのです。現在は、戦後長らく利用されていた金沢大学が総合移転を間近に控え、今また金沢のシンボルの将来の有りかたに対して大きな問題を投げかけています。

尾張町商人は、前田利家公によって歴史の表舞台に立ちましたが、時の蓄積の中に熟成されて来た先人達の遺産を引き継ぎ、飽きない(商い)で創造的に改革し続けることを忘れてはいません。時代の荒波を包含して、残るべくして残った老舗の街の真骨頂は、ただ通

り過ぎるだけでは分かりません。現代の車社会の中で、つい見失いがちな生まれながらのこの足を使って町並を歩くとき、自然に考える早さは歩く早さに合い、平素気の付かなかったことに注意が行くものです。様々に目先を彩る近代化とは異なり、ここにはゆとりある人と人の出会いを通じて再発見するおもしろさに溢れています。

「おやま」に至るまで

石川県地方が、まず越中の国から能登国として分立したのは、律令時代七～九世紀まで延々と続く蝦夷征討に必要な兵員や物資の補給基地としての役割からであり、又中国大陸との対岸交渉の玄関口としての役割を果たしていたからだと推測されます。しかし、東北の情勢が一段落するや否や、天平十三年（七四一）から一時期再び越中の国に併合されてしまいます。万葉集で有名な大伴家持が越中国司として赴任していたのもこの頃です。

加賀国が誕生するのは、やっと平安遷都が行われてからなのです。越前の国府（現在の武生市）から、弘仁十四年（八二三）加賀・江沼郡を切り離して独立してからのことです。

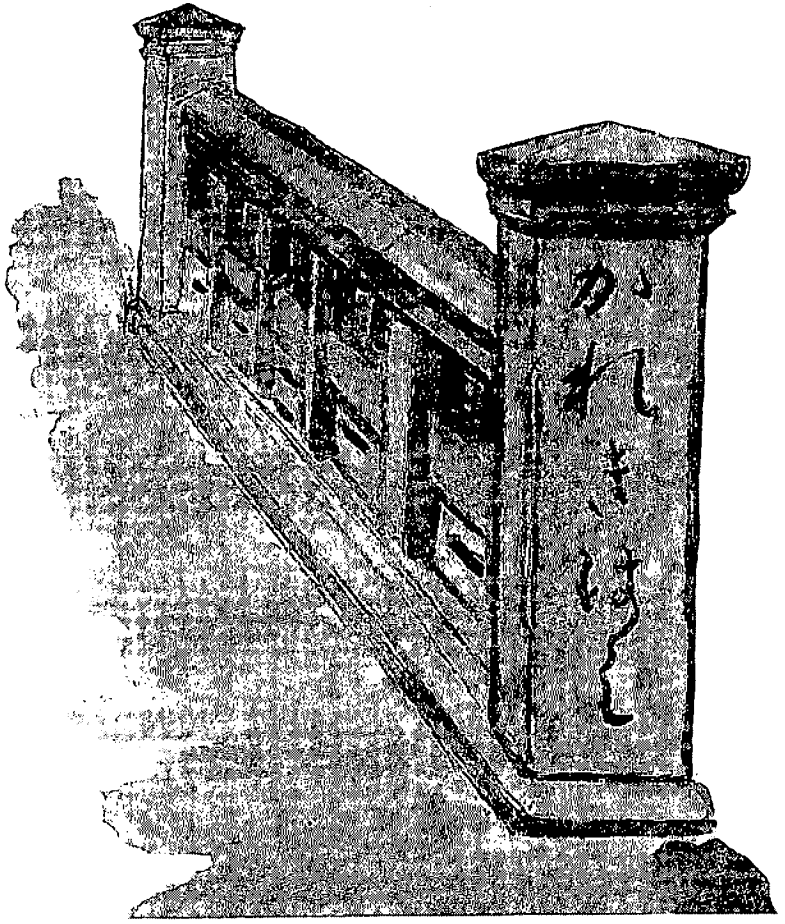
平安時代は、「受領ノ持タル国」として受領の厳しい収奪にさらされる中で、後の武士階級が力を蓄わえる時でした。そして鎌倉幕府から南北朝内乱期には、北加賀の十字路（現在の野々市町付近）に守護所を構えた富樫氏が加賀の支配を得るのです。やがて、今度は

この守護の圧政に苦しむ農民が浄土真宗による惣を結成しだし、ついに一向一揆へと展開して行くことになります。文明の一揆、長享の一揆（一四八八）を経て富樫氏は農民に滅ぼされ、加賀は「百姓ノ持タル国」となります。

金沢が初めて歴史に登場するのは、こうした変化に先立つ正和元年（一三一二）に遡のぼる商業集落である山崎村凹市「くぼいち」からであります。この凹市の場所については石川郡窪村（窪町）説と久保市（尾張町）説の二つがありますが、山地の窪村より、浅野川沿いの金剣神社の氏神を祭っていた久保市乙剣宮（神仏混淆の頃とて久保市金剛寺と称して不動尊を併せ祭っていた）界隈の方がそれであるといわれています。

加賀一向衆の自治の中心は、すでに栄えていた山崎村凹市の場所（金沢城の前身地）に、本願寺の支坊として最終的に建てられることになります。この場所がどれほど加賀の人々の心の支えであったかということは、つい最近まで金沢近郊の老人達が金沢へ行くことを、「おやま」へ行くといっていたことからも分かると思います。そして、「おやま」の中心とは金沢城であり、同時に尾張町をも指すことになっていたのです。

尚、当時の人達に読み書きが普及していなかったので、今のように御山・尾山・小山のどの字を書くのかという漢字についてはあまり喧しくなく、言葉でしゃべるのが主であったようです。


かれきけ

枯れ木橋挿話

この頃の山崎村凹市界隈は乙剣宮を背景とした市場で、今の尾張町あたりは神社の境内として一面森林に囲まれていたとのことです。こうして加賀一向衆の自治とともに、三百年近く平和は続いたのですが、元亀から天正にかけて織田信長の軍（尾張勢）が一向一揆討伐の名の下に加賀へ攻め入って来たのです。

彼等の戦法は、民家をことごとく焼き払い、住民を一人残らず虐殺するのが手口で、その徹底的な力の下にたちまち加賀は征服されて行きました。久保市宮も境内の森林もことごとく焼き払われて枯木の林となってしまったのです。この荒廃があまりに激しく、年月を経ても枯れ木が放置されたままになっていたことから、この辺が一時枯木村と名付けられ、橋にも枯れ木橋と名がついたわけです。

当時加賀を守る一向宗の軍は地方豪族による外なく、森下城主亀田大隅、松任城主鏑木右衛門等が主にいました。亀田は本願寺の命により河北郡二番旗本として、これより先、天正元年（一五七三）上杉謙信が加賀を攻略せんとして津幡に迫った時、これを撃退して能登へ走らせたのですが、織田軍の柴田勝家には抗し得ず、遂に森下は落城して勝家の軍門に降ってしまったのです。

城下町金沢の町作り

今までは、中央から見向きもされなかった加賀地方が歴史の舞台になり始めたことで、戦国時代末期に天下を統一しかかっていた織田信長の武力闘争の対象となり、こうして加賀一向衆は滅ぼされてしまうのです。中でも最も活躍した前田利家公は、信長よりの能登国・七尾についで、秀吉より加賀国・金沢を与えられ、天正十一年(一五八三)に金沢に入城します。

前田利家公は、一向衆の人々にとって重要な精神的意味を持っている、この「おやま」の場所に金沢城を建設するというまさにそのことで、加賀全部を旧秩序から自分の新態勢になびかせることに成功し、繁栄を迎えることになります。同時に、ようやく戦争中心から経済中心へとお城の役割が変わりつつあることを一早く見抜いていたともいえます。

ここに至りようやく、金沢が歴史の檜舞台に晴れて登場するわけです。実はこれまで陽の目をみなかったのは、

郷土史家の山森青硯氏によれば、〃犀川が大変な暴れ川であり、絶えず乱流する水のために、今の金沢の中心地が洪水の危機に脅かされる沼地であり、人々が積極的に寄り付けなかったから〃といわれています。だから、犀川の治水がなされて初めて、金沢はその本来の町としての構造を整える前提が出来上って行くのです。

前田利家公は七尾から金沢に来るや、早速土木工事として城郭の整備を行なうと共に、沼地同然の犀川を、挙げて用水や堀としながら、水の流れをきちんとして下流に流すという大事業に専念したわけです。そのために、例えば石垣の高山右近とか、用水の板屋平四郎とかの技術者を使って町作りを実施して、藩政時代三百年間の繁栄の基礎を固めたのです。

特に、当時の治世者のほとんどがそうしていたように、自らの出生地であり、気心の知れた尾張名古屋の荒子地方より連れて来た商人を住まわせた、ここ尾張町はお城のお膝元ということも手伝って経済・政治面で重要な役割を担って繁盛していました。

懸作(かけづく)りの繁栄とともに

加賀藩主の参勤交替は、通常大手門より出発し、藩祖の率いて来た町人達の尾張町通りに出、右折して橋場町から北陸道へ抜けて行く慣例が最も多かったようです。そのためか、当時尾張町だけが京都と同じようにマス目のように区画整理されており、対外的に立派になっていました。大手門は名のごとく金沢城の表玄関であり、北向きに行政府の窓があって、御町会所がその横にありました。だから、政治・経済の事柄がみな集まって来て、しかも情報交換と許可認可制の中心が尾張町周辺にあったので、物をたんに売るだけでない

人々の流れが出来上がりつつあったのです。

一方、江戸初期から上期にかけて、橋場町界限(旧「懸作(かけづくり)」)に掛作りの仮屋を設けて商売するものが出て参ります。これ等は古着を掛ける(今の貸衣装屋)商売であり、特に男子の礼装を主体とし、武士にとっては登城衣装や参勤交替の衣装を、町民にとっては祝祭日の晴着にと利用されたようです。当時の商店は店内に入って商談することが一般的で、表通りより店内を見せる風習がなかったのに対し、こうした商売の性格上表通りより見えるようにしてありました。ために武士・町人の別を問わず人々は通りを往来し易くなり、尾張町周辺の活況は江戸時代を通じてますます盛んになって行きます。

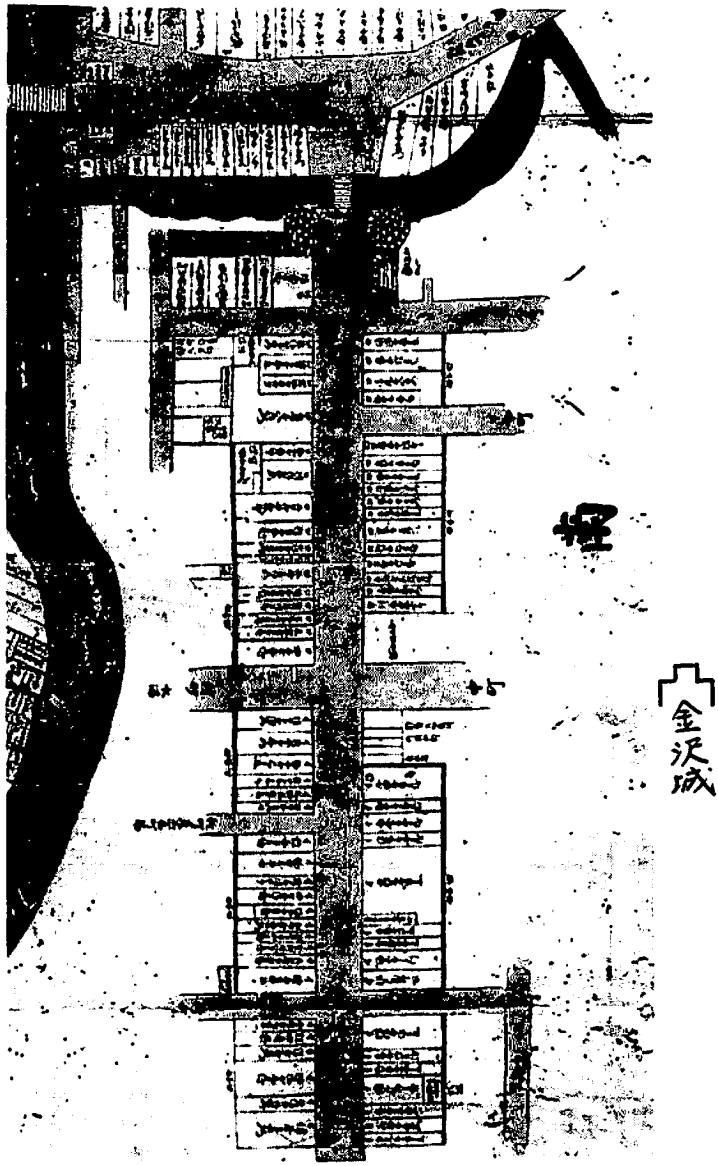
この内、大手門から中町(NHK金沢放送局前付近)を通り、尾張町に出て右へ曲がって枯れ木橋を通り、懸作り(橋場町)に至る道筋が昔の表通りだったのです。別に、黒門から出て博労町を得て尾張町から懸作り(橋場町)へという道筋がありましたが、こちらは氏子も違うし、通用門からの出入り人ということで格式は一段下でした。大手門から出て尾張町にぶつかった処から、懸作り(橋場町)側が下尾張町といわれ、武蔵側が上尾張町といわれてました。

そしてこの表通りに当たる下尾張町は参勤交替の正式な道筋であるため、こちら側だけ雑用[ぞうよう]が掛かってくる程でした。それは、お殿様お通りのために家の前の造りを

良くしておかなければならなかったためです。例えば、冬になったからといって軒下に大根を掛けたままにしておくとか、傘屋が和紙に塗った油の臭いのする作りかけの傘を店先に放り出したままにしておくとか、臭いのするもの（共同便所など）や目障りになるものは下尾張町では置いてはいけないということが、この通りの不文律になっていたのです。ために、尾張町の中でも下尾張町は藩政時代は別格としての格式を持っていたのです。

江戸三度京三度の起点・尾張町

商人の町尾張町はその経済効果を得るために、各種の情報収集を行なっていました。その現われが江戸三度・京三度といわれるこの飛脚制度です。三度というのは月に三度江戸や京都を行き来していたわけですが、関所を加賀藩の全面的信頼を背景に通るため、大変な責任があったのです。最初は足軽がこの任にあたっており、早道飛脚などと呼ばれていたのですが、いつの頃からか民営に代わって行ったのです。初期には十間町にあって、四日、十四日、二十四日と定まっていたのですが、後には業績が上がるとともに月六回に増え、一番効率的な尾張町に移されたものです。さらに、藩の急用ある時や藩士の依頼ある時は別に仕立飛脚便を発するようになったといいます。文化八年（一八一一）の金沢町絵図（金沢市立図書館蔵）を見ると、上尾張町に飛脚所（現在の福久屋）が明示されています。



文化８年　金沢町会所に備えつけられた町絵図（尾張町の部）

金沢市立図書館蔵

主な仕事は、書状と小包を持って江戸へ走る、又京都へ走ることで、天下の実力者である将軍及び日本の象徴である天皇の情報を表立って得ていたのです。極論すれば今の外交官のようなものといいましょうか。それが民間で、しかも尾張町の商人が束ねていた(四～五人の合名だった)ということを忘れてはなりません。元禄十三年(一七〇〇)には、藩用の荷物一貫目を無賃輸送すべき義務を負っていたということが、単なる商人の営利だけではなかったことを示しています。

萬治二年(一六五九)の規定によれば、江戸＝加賀間の早飛脚で、冬季間を除き五日以内とされていました。それ以上七～十日間のものは中飛脚、常飛脚と呼ばれていました。それぞれ路銀を別にしており、万一規定時間より超過する時は路銀を減らされたのです。

こうした情報の取り次ぎという藩政にとって大事なことを、民間の尾張町商人に任せていたことに、並々ならぬ前田家の配慮の一片を見せられる思いがします。

尾張町の過去と未来

「野々市へ一里三十一町二十四間、南森下へ一里二十五町三十間」という、私達に馴染みある案内が書かれている現在の里程元標は、明治六年のままのものではありません。木柱から石柱に変わっており、一昨年建てられたガス灯と並んで建っております。

里程元標が建てられた当時は、ガス灯ではなく、「名古屋鎭台」と書かれた木柱が並んでありました。江戸時代より続く尾張町と懸作りの賑わいが、文明開化に沸く金沢の政治・経済・軍事の中心にここを選んだためでしょう。

やがて、明治三十一年(一八九八)に金沢駅が出来、日露戦争が始まるとともに、従来加賀藩の台所として活況を呈していた、宵草辻市場近江町のある武蔵から駅前へ徐々に人が流れるようになります。

さらに時代を下り、第二次大戦後の昭和二十四年(一九四九)の国立大学設置法の公布により、城内に金沢大学が設置されてお城との商業関係が薄くなって行きます。それと相前後して、近代化を推進し続ける片町・香林坊に人々は目先の変化を求めて流れ出して行くようになります。　人情を尊び、老舗の威風を誇り、蓄積された文化の薫りすら漂う尾張町の味わい深さは、どうしても派手さに欠けるため、町並は若干の寂しさに見舞われることになります。しかし、頑くなに商人の原点を見詰めて、根本的な部分で時代を先取りする気概は決して失われるものではありません。

二十一世紀を間近に控えて、昨今の高度情報化社会の浸透とともに、かえって他の何物にも代えられない尾張町の伝統的な文化遺産が、今まさに再認識され出しています。物のみに飽き足らなさを感じ始めている人々に注目されていることは見逃せません。金沢の歴

史そのものを感じさせるこの町並は、過去を否定してデジタル的に刹那的な今を表現するのではなく、過去の魅力を再発見してアナログ的に時間の重味を表現するのに最も適しているのです。

金沢の個性は、その機能と文化にあるといえます。尾張町は近代的な機能こそ持ち合わせていませんが、長年培って来た歴史と伝統に恵まれております。

「カタカナの街」が氾濫する中、真実の個性である「ひらかなの街」を見い出し、実際に商い(飽きない)する人々が住まいして生活と密着する、いわば人と人が本来の姿で触れ合う、「やすらぎ」を与える街創りが私達の指向する未来です。尾張町は、金沢という車の片方の車輪が近代化ならば、歴史と伝統に育くまれた文化の車輪を受け持ちたいと考えるわけです。

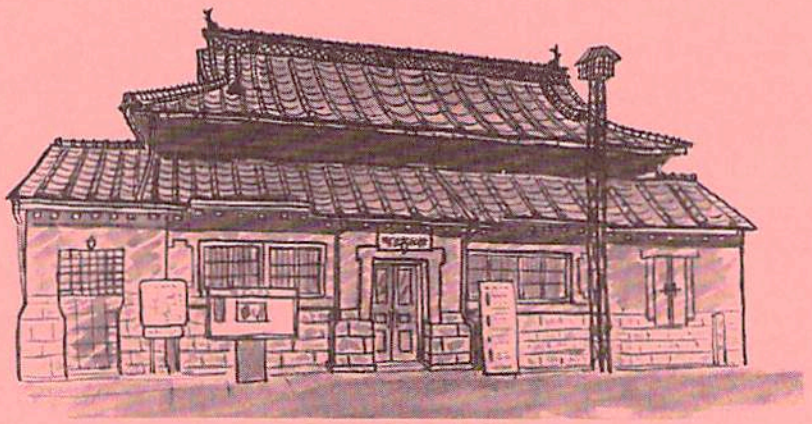
そして今、コンベンション都市としての金沢の評価が、人々の心の琴線に響く「アナログの街・尾張町」を発信地として認められることを願うものです。

あとがき

尾張町の素晴しさを再発見しようとして訪れて頂いた皆様、本当にありがとうございます。時の流れの中に、しっかりと自分の時をつかんでいるつもりの私達の町並に、最初はとまどいを覚えたことと思います。けれど、味わう程に汲み尽くせない意味を見い出せるものならば、これ以上の幸いはないと存じます。今後とも、尾張町商店街を宜しくお願い申し上げます。

尚、この案内書はこれまで尾張町商店街振興組合と尾張町若手会で出版して来た以下の小冊子が基本となっております。

「加賀国尾張町」 尾張町通り歩道・街路灯完成記念誌
「尾張町物語」 尾張町を愛した一商人の目より
「尾張町繁昌記」 金沢弁でつづる商人のたた住まい
「尾張町界隈の老舗と名所の由来」 現在に生きる歴史の息吹
「古老の語る尾張町今昔・前編」 歴史と伝統に新しい意味を求めて
「古老の語る尾張町今昔・後編」 歴史と伝統に新しい意味を求めて
「歴史と共に歩む尾張町町民文化館」 鯱瓦の聞いて見てきた尾張町の変遷
「アナログの街・尾張町」 尾張町商人の伝統とロマン



尾張町町民文化館

一九八七年十一月吉日発行
尾張町商店街振興組合
理事長　山田　勝二
尾張町若手会
会　長　武部　守男
編集責任　石野　琇一
金沢市尾張町一丁目十一番八号